



# しびき

## CONTENTS

- 1 経済産業省・安藤鉄鋼課長との意見交換会概要
- 4 コーザイ訪問 三菱ガス化学
- 7 平成17年度 出荷実績
- 7 色見本帳作成
- 8 PR広告掲載シリーズ(4)

48

## 経済産業省 安藤鉄鋼課長との 意見交換会

### 概要

ドラム缶工業会は3月24日の理事会で経済産業省製造産業局の安藤久佳鉄鋼課長との意見交換会を開催しました。中国の鉄鋼生産の動きは日本のドラム缶工業にも大きな影響を与えるものですが、その中国の鉄鋼産業の現状と今後の動きなどについて、貴重なお話をいただきました。

#### 中国に近隣している国としての問題

日本の鉄鋼産業は、オイルショックやバブル崩壊など様々な問題に智恵を絞りながら粗鋼生産1億トン前後を維持してきました。これまでは国内で対応すれば対処できたのですが、これからは中国での鉄鋼産業の動きが大きく影響してきます。国内では解決できない、いわば他力的な問題です。鉄鋼業としてみれば「大地の子」でも分かるように日本と中国は長い関係を持っていますが、中国の生産増の問題はここ3年の間に起こってきた問題で、この間、中国の粗鋼生産が03年の2億2千万トンから、04年は2億7千万トン、昨年は3億5千万トンにまで伸びて、こうした伸びを示す国に近隣している国としての問題になってきています。



.....

### 技術と市況、二つの視点

.....

この問題には二つの視点があります。一つは技術力で、日本と中国では技術力に格差はありますが、それは相対的なものであり中国の技術レベルが日本に追いつくのはいずれ時間の問題です。日本のユーザーの目は厳しいのですが中国の技術力が上がれば、中国品を使うこともできると日本のユーザーは判断するでしょう。もう一つは市況の問題です。アジアでの市況の動きは日本においても同様に動きます。品質が違えば市況も違うのですが、あれだけの量が市場に出回れば全体の市況にも大きな影響を与えます。

とはいえ、何とかしなければならぬ。これまで政府間の対応では中国商務部を相手に貿易面での話し合いが中心でしたが、今はそれでは根本の議論にならない。生産能力の拡大が焦点なので生産能力をコントロールする部局との対話が必要なのです。中国では国家発展改革委員会の工業司が設備の新增設許認可権をもっています。鉄鋼産業発展政策もここがまとめています。ということで05年11月から工業司との対話をスタートさせ、今年1月には経済産業省製造産業局長と工業司長との対話も行いました。



.....

### 共通認識を持った日中協力

.....

中国は鉄鋼産業発展政策の実行にあたって、エネルギー、水、環境にシビアになっており、これらの問題への対処では日本に協力を要請しています。日本が協力することは結構なことです。その目的意識をはっきりさせることが重要です。認識の共有化といえますが、「中国は鉄鋼産業を適正規模の大きさに抑える、だから日本は協力する」との共通認識が必要です。工業司では06年は需要の範囲内に抑えるとして10%増の3億8000～9000万トンの生産を予想していますが、中国では製造と販売の連携が取れていませんからどうなりますか。

中国の鉄鋼産業では省エネ対策などかなり進んできており侮れません。かつてエネルギー効率は日本より50%くらい悪いといわれていましたが、いまではエネルギー消費は日本の1.1～1.2倍程度にまで改善、水の使用量も乾式装置が多いので日本よりよいし、400～500立方メートルのミニ高炉もきちっと公害対策をすれば十分優位性があると思います。大型高炉では5000立方メートルの計画もありますが、中国では大型高炉とミニ高炉に2極化していくでしょう。300立方メートル以下の高炉は廃止するとしています。

.....

### 敵対的買収への対応も課題に

.....

中国の粗鋼生産量の拡大が日本の鉄鋼産業に与える影響も大きいのですが、外資の敵対的買収も大きな問題になっています。新会社法では07年5月から外国企業が直接株式を持つことができるようになります。外資系企業の大手中鉄鋼メーカーに対する買収問題に関しては、いずれ日本、韓国でも起こってくると思います。時間の問題です。極論すると絶対防衛できることではな

いのですが、防衛策について議論を深めていかなければなりません。この防衛策として効果的なのは安定株主をつくることです。株の持合いを解消してきましたけれど、これをもう一度、再検討することが必要かもしれません。鉄鋼メーカー間で持ち合うか、買収されたら困るというユーザーに持ってもらうか。こうしたことを含めて議論をする必要があります。日本の鉄鋼産業の課題は、一つに中国の粗鋼生産能力をなんとか抑えたいことと、もう一つが敵対的買収への対応です。

質疑応答では

理事会との質疑応答では、「鉄鉱石の安定化」については、原料サプライヤーの寡占化が問題となっている

が、これを阻む手立てがないこと、「中国の鉄鉱石自給率」については、輸入と国産が半々だが輸入増にあり、良品位な鉄鉱石は大手企業に回していること、「中国の需給動向」については、06年は10%くらいで生産増が収まれば需要に対する供給過剰にならないだろうが、実需がどれだけあるのかが掴みにくいものの、現状では輸出入がバランスとれていることなどが説明され、最後に中国の鉄鋼産業について「予測できず、データもなく、我々はどうすればいいのか」との理事会の意見に、「情報はたくさんあるが本当かどうかは分かりません。全体像が見えないから実態も不明になります。ある意味では深刻に考えないほうがよいともいえます。それが本当かどうかを見るには自分で情報を取っていくしかないでしょう」と語った。

ドラム缶工業会新役員紹介



理事長	今井 忠	日鐵ドラム(株) 代表取締役社長	(留任)
副理事長	谷口 勲	JFEコンテナ(株) 代表取締役社長	(留任)
	山本雄造	(株)山本工作所 代表取締役社長	(新任)
常任理事	200リッター缶関係	村上 靖	東邦シートフレーム(株) 代表取締役社長 (留任)
	中小型缶関係	里 卓郎	ダイカン(株) 代表取締役社長 (留任)
	ペール缶関係	前田磯友	(株)前田製作所 代表取締役社長 (新任)
理 事		斎藤邦一	斎藤ドラム缶工業(株) 代表取締役社長
		奥 光二	山陽ドラム缶工業(株) 代表取締役社長
		大野良司	JFE協和容器(株) 代表取締役社長
		野上正道	(株)ジャパンペール 代表取締役社長
		長尾浩志	(株)長尾製缶所 代表取締役社長
監 事		中村君子	(株)東京ドラム罐製作所 代表取締役社長 (新任)
		関根利三郎	新邦工業(株) 代表取締役社長 (新任)
委員長	企画・統計委員長	渡来信介	日鐵ドラム(株) 取締役(就任予定) (新任)
	技術委員長	近江 洋	(株)山本工作所 技術本部・部長 (新任)
	ペール委員長	深浦慎介	(株)ジャパンペール 取締役 (新任)

(注)森島金属工業(株)は、06.4.1から“準会員”登録に変更。

三菱ガス化学の物流業務を担っているのが「原料物流センター」。効率的な物流の仕組み作りから、適切な原料受入と製品出荷を取り仕切る。多様な製品群を抱える会社だけに、物流の手法も様々。工場など現場での効率物流の実現に向けた創意工夫も少なくない。三菱ガス化学は今年度から新中期経営計画をスタートさせた。前中計の成果を踏まえ、さらに高収益企業を目指すとするもの。原料物流センターの藤田誠センター長は「各カンパニーの横串機能として、原料物流センターの果たす役割はますます重要になってきている」と、新中計でも積極的な物流業務の推進を目指していく。



## 原料物流センターが中心に

三菱ガス化学は事業部門にカンパニー制を導入しており、原料物流センターが担当しているのは天然ガス系化学品カンパニー、芳香族化学品カンパニー、機能化学品カンパニーの3カンパニー。脱酸素剤「エージレス®」や電子材料の特殊機能材カンパニーは、独自に物流業務を展開している。原料物流センターはコーポレート部門の組織で、原材料の購買を担当する原料グループと、製品の物流などを担当する物流グループで構成される。



原料物流センター長 藤田誠氏(左)  
原料物流センター 物流グループ課長 馬場賢尚氏(右)

事業部門がカンパニー制であるだけに、藤田センター長が言うように、各事業部門であるカンパニーをサポートする購買・物流の専門スタッフとしての「横串機能」の役割は一段と重要になっている。

効率物流の実現に当たっては2005年1月に製品物流を対象とする「全社物流システム」を構築、原料についても2007年2月のスタートを目指して「新購買システム」の構築を進めている。

全社物流システムでは受注デリバリー機能をセンターに一元化するとともに工場の出荷部門の情報も全体で把握できるようにした。輸送に関する詳細な情報も一元集約されるとともに、それらの分類別も可能となり、運賃シミュレーション機能により最適輸送手段を選択、トラック積み合わせ機能により積載率の向上と最適車両による輸送を実施し、総合的な輸送の最適化が図られた。同時に物流におけるエネルギー削減やCO<sub>2</sub>の排出削減にも貢献している。

構築を進めている新購買システムではドラム缶などの容器、包装資材などの購入も対象にする。多種多様な製品でグレード数も多いため必要な容器・包装材料の種類



も多様化している。それらをトータルで把握するのに新システムが威力を発揮する。原料部門、物流部門でそれぞれ新システムが揃えば、物流業務はさらに飛躍的に効率化される。「アナログからデジタルへということで、これでリアルタイム処理ができ、情報の共有化が実現する」（藤田センター長）と、次代の物流システムへの期待は大きい。

### 多彩な製品、多様な物流

三菱ガス化学の製造品目は多岐にわたる。同社の製品一覧を見ても主要製品としても品目だけでもざっと150品目にのぼり、多様なグレードを持つものも少なくない。当然ながら物流手段や荷姿も多彩だ。ケミカルタンカーから、ローリー輸送、ISOタンクコンテナをはじめ、各種容器の種類も多い。200リットルドラム缶、ペール缶、ステンレス製ドラム、石油缶、中型容器のIBC、それに輸

出用ではプラスチックドラム缶も多用されている。

環境への対応を重視する企業にとっては物流手段だけでなく、製品容器・物流容器にも環境配慮型であることが望ましいと、容器選定ではそうした配慮もする。三菱ガス化学でもこうした容器については、リサイクルできるものであったり、環境負荷の少ないものであることなども考慮して選定している。

容器のなかではドラム缶の使用量はかなり多い。物流効率を考えてIBCなどの中型容器に代わってきているところもあるが、それでもドラム缶の使い勝手のよさは捨てがたい。「どのような容器にするかは、顧客に応じてケースバイケースということです。受け入れる設備の問題もあって容器の形態はそう容易に代えられません」（藤田センター長）というのが現状のようだ。

さてそのドラム缶だが、新潟工場から出荷されるドラム缶の色は「MGCブルー」というコーポレートカラーでほぼ統一されてきている。「当初、製品ごとにドラム缶の色を変えてそれで識別もしていたが、ラベルで識別するよう



危険物立体自動倉庫(左)



使い勝手のよさが使用量に表れているドラム缶(右)

にしてドラム缶のカラーを統一した。これでドラム缶の調達リードタイム短縮とドラム缶の在庫削減が図れた」（馬場賢尚物流グループ課長）という。他の工場にもこうしたコーポレートカラーによるドラム缶の色の統一は進めたい考えた。

### ドラム缶への注文

物流担当者にとってコストダウンは大きな課題。様々な創意工夫も重ねている。「乾いたタオルを絞るような」という話はよく聞く。それゆえ、物流容器に対する注文も少



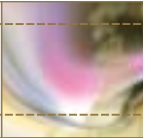
ドラム缶への注文は、「大きさ・厚さの統一を！」

なくない。ドラム缶については「アジア地区での大きさ、厚さなどを統一して欲しい。容量が同じ200リットルでも胴回りが太く、高さが短いものもあり、ハンドリングの関係でそうしたものは使えない。国内外の価格差もネックになっている」（藤田センター長）という。日本の多くの化学企業が中国やアジア地区に製造拠点を構えている。生産面から見れば日本を含むアジアは一つのフィールドであってそこで各工場が製造拠点としての役割を分担している。容器としてのドラム缶はその製造拠点の近くで入手することが望ましいということを考えれば、アジア各地で同じドラム缶が購入できるようになればということだろう。

### 新中期経営計画を支える物流機能

三菱ガス化学ではこの4月から新中期経営計画「協創2008」をスタートさせた。協創とは「差異化戦略の徹底により個々の強みを強化し、その強みを融合させることによる新たな価値の創造」との意味。前3か年中計の「協創2005」の成果を踏まえてグループ全体での高収益体質の確立を目指していく。この新中計のなかでも原料物流センターの果たす役割は重要だ。同センターとしては、物流業務の対応をグループ全体へ広げていくこと、新システムによる原料集中購買を実現すること、カンパニーの横串機能としての物流業務をさらに強化していくことなどを目標に掲げている。中国、アジアなど海外展開も多い会社だけに、原料物流センターにしても海外市場を視野に入れた活動もテーマに上がる。その海外市場に対しては、海上輸送手配の効率化などの成果やノウハウを踏まえて、「当面は海外事業の支援ということではありますが、将来的には中国国内での物流システムの確立なども目指していきたい」（藤田センター長）と、意欲的な取り組みも始まっている。

# 平成17年度出荷実績



平成17年度の200Lドラムのお荷は、過去のピークであった前年度の15,186千本に対して98.5%の14,952千本と、引き続き高い水準となりました。これは需要の78.2%を占める化学分野で、中国、ASEAN向けを中心とする輸出需要が引き続き堅調であったことが要因と言えます。

中小型缶は、対前年比86.5%、実数で151千本減の967千本と大幅減となりました。

ペール缶は、22,642千本と対前年度比100.1%とほぼ前年度並みとなりました。全体の50.1%を占める主用途の石油向けは前年度比101.4%、42.6%の化学向けは1.3%減となっています。

## 平成17年度缶種別・用途別出荷実績

缶種	平成17年度実績							トン数
	本数 (千本)	前年度比 (%)	用途別〔本数(千本)〕					
			石油	化学	塗料	食料品	その他	
200L缶	14,952	98.5	(93.4) 2,043	(99.5) 11,708	(103.5) 815	(91.2) 182	(84.6) 204	351,245
ペール缶	22,642	100.1	(101.4) 11,341	(98.7) 9,657	(95.8) 900		(102.2) 744	36,788
中小型缶	967	86.5	9	859	18	8	73	6,346
亜鉛鉄板缶	451	109.2		185	3	2	261	3,039
ステンレス缶	39	84.8		25	1	1	12	917
合計	39,051	102.0	13,396	22,507	1,758	191	1,199	398,335
前年度比(%)	99.1		95.1	98.7	102.9	89.8	95.4	98.1
構成比(%)			16.4	7.5	5.4	1.1	2.1	100.0

(注) 1. 用途別200L缶、ペール缶の上段( )は前年度比。 2. 前年度比、構成比はトン数ベース。 3. 亜鉛鉄板缶、ステンレス缶は、200L缶及び中小型缶を含む。

## 品種別出荷推移本数

(単位;千本)

	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度
200L缶	12,142	12,454	11,380	12,419	12,849	12,386	13,590	14,502	15,186
ペール缶	25,711	25,662	24,079	24,928	24,775	22,952	23,049	22,898	22,630
中小型缶	1,186	1,197	1,042	1,134	1,113	981	1,053	1,042	1,119
亜鉛鉄板缶	357	336	337	320	315	307	312	329	413
ステンレス缶	23	22	29	32	38	22	30	42	46
合計	39,419	39,671	36,867	38,833	39,090	36,648	38,034	38,813	39,394

## ドラム缶 NEWS

ドラム缶をご利用の皆様へ

## ドラム缶の色調統一にご協力ください: 色見本帳作成

ドラム缶工業会は重金属を含まない「標準14色」を決めています。しかし、これまで同一色彩名でも、ドラムメーカー/工場によって微妙に色調差が生じておりました。調査すると、この14色でも実際には100を超える異なった色でした。

今回、工業会では標準14色については、実缶の色調を統一しようとしています。同じ色記号であれば、同じ色調となります。(JISによる色の表示方法、測定方法を採用した標準化)

この色調統一にご協力いただければ...

色替えが少なくなり、それに伴い色替え時の塗料ロスが減り、廃棄物の削減、環境負荷物質(VOC)の低減につながります。

同一記号の色は各ドラムメーカー/工場が同一の色調となり、互換性が増し、緊急時の代替納入がしやすくなります。

色合わせと確認の時間が少なくなり、スピーディーな対応が可能となります。



10月を目途に工業会各社は順次新しい統一した色調に変更いたします。ご協力の程お願い申し上げます。なお、移行期間は色調の異なるドラム缶が併存いたしますことをご容赦ください。



掲載シリーズ 4

ドラム缶工業会では、ペール缶の再認識をお願いするPR広告を燃料油脂新聞に掲載しています。2005年12月2日に燃料油脂新聞に掲載した広告をご紹介します。

リサイクルシステムの維持にご協力をお願いします。

ペール缶の優れた特徴として

- 表面の美しい金属印刷が、商品価値を高めます。
- 危険物容器として最高です。
- 再利用にも適しています。
- 鉄製ですから環境に優しい。
- テーパータイプだから保管場所を取りません。

などが有ります。

ペール缶「五つの特徴と利便性」  
「鋼製ペール取扱上の注意」  
パンフレット差し上げます。

ご希望の方は下記住所までお申し込みください。

再認識  
ペール缶を  
してください

鋼製ペール取扱上の注意 ●ペール缶「五つの特徴と利便性」

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 鉄鋼会館6F  
TEL.03-3669-5141 FAX.03-3669-2969  
E-mail:drum.pail@jsda.gr.jp URL http://www.jsda.gr.jp

日本ドラム缶更生工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 鉄鋼会館6F  
TEL.03-3667-8904 FAX.03-3669-9700  
E-mail:jdraeast@io.ocn.ne.jp URLhttp://www1.biz.biglobe.ne.jp/~koseidrm/

会 員

《正会員》

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 斎藤ドラム缶工業(株) | (株)東京ドラム罐製作所 |
| 山陽ドラム缶工業(株) | 東邦シートフレーム(株) |
| JFE協和容器(株)  | (株)長尾製缶所     |
| JFEコンテナ(株)  | 日鐵ドラム(株)     |
| (株)ジャパンペール  | (株)前田製作所     |
| 新邦工業(株)     | 森島金属工業(株)    |
| ダイカン(株)     | (株)山本工作所     |

《賛助会員》

- エノモト工業(株)  
三恵マツオ工業(株)  
丹南工業(株)  
(株)大和鐵工所  
三喜プレス工業(株)  
(株)城内製作所  
東邦工板(株)  
(株)水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10  
(鉄鋼会館6階)  
TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969  
e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL: http://www.jsda.gr.jp

ひびき No.48(平成18年6月15日発行)  
発行人 ドラム缶工業会  
専務理事 藤野 泰弘